九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

基督教聖書和譯の歴史

豊田, 實

https://doi.org/10.15017/2557075

出版情報：文學研究. 12, pp.52-94, 1935-07-05. 九州文學會
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

基督教聖書和譯の歴史

豐田實

一、天主教の渡來と聖書一部分の和譯

基督教の聖典には復活のキリストが弟子達に命ぜられた言葉として「汝ら往きて、もろ〳〵の國人を弟子となし、父と子と聖靈との名によりてバプテスマを施し、わが汝らに命ぜし凡ての事を守るべきを教へよ」とあり、また「視よ、我は世の終まで常に汝らと偕に在るなり」とある（マタイ傳二十八章の終參照）。

爾來イエス・キリストのこの命令は、彼を信ずる者によつて忠實に遵奉せられ、陸に海に新しき路の開くる毎に、或は路なき山野を踏み分け荒海を押し渡つて迄も、神の國の福音は宣べ傳へられ、我が國にも天文十八年（西暦一五四九）フランシスコ・シャヴィエルが先づ鹿兒島にキリストの教を齎らし、九州から畿内にかけて非常な勢を以て布教され、最盛時には日本在留の宣教師約三百人、教會二百數十、信徒二三十萬を算したのであるが、遂に寛永十四、五年（一六三七―三八）の天草の亂を以て、我が國に於ける天主教の布教は一段落を告ぐることゝなつた。

斯く天主教が先づ渡來して盛大であつた時代には、各地のその學校に於てはギリシヤ、ローマの古典書が日本人教徒の間に讀誦され、中にはラテン語の教師となつたものさへあつたとのことである。而してその間耶蘇會が我が國に

於て出版した文献が今二十餘種殘つて居り、其中には天正十九年（一五九一）肥前加津佐の其宗派の學林で印刷された『聖徒の御作業の内拔書』を初めとして、ローマ字日本語の文献も相當にあり、例へば文祿元年（一五九二）天草の學林で出版されたローマ字日本語の『ドチリイナ・キリシタン』（吉利支丹教義）の中には聖書の一部分の邦譯が含まれてゐる。即ちその第三章の中には「主の祈」、第七章中には「十誡」、第十二章中にはマタイ傳第五章三節から十節に亘る「八福」の譯がある。左にその「主の祈」と、それを東京帝大教授橋本進吉氏が漢字交り文に書き改められたものを引用しよう。（次のローマ字文中xはshの音を表はし、f即ちfの横棒の右へ通つて居ないものはロング・エスと稱し、語尾以外の位置に用ゐられてsの音を表はす。）

Ten ni maximaſu vareraga von voya mi na uo tattomare tamaye; miyo qitari tamaye. Ten ni voite go Vontade no mama naru gotoqu, chi ni voite mo araxe tamaye. Vareraga nichinichi no von yaxinai uo connichi ataye tabi tamaye. Varera yori voitaru fito ni yuruxi moſu gotoqu; varera voitatematçuru coto uo yuruxi tamaye.

Varera uo Tentaçã ni fanaxi tamó coto nacare; varera uo qeôacu yori nogaxi tamaye. Amen

天にましますわれらが御親御名を崇まれ給へ、御代來り給へ。天に於て御オンタアデの儘なる如く地に於てもあらせ給へ。我等が日々の御養を今日與へたび給へ。我等より負ひたる人に赦し申す如く、我等負ひ奉る事を赦し給へ。我等をテンタサンに於し給ふ事勿れ。我等を凶悪より逃し給へ。アメン。

なほ『ギヤ・ド・ペカドル』（罪人を導く書）に引用された聖句のなかに次のやうな詩篇の譯文がある。

御主わが光明と息災に在ませば。誰をか恐れをのゝくべき。御主我命の御守りにて在ませば。何者をか恐るべ

き。敵の諸軍勢。われに對して陣を張り圍みをなし弓箭を起すといふとも。御主に賴みをかけ奉るべし。

是は詩篇第二十七の第一節と第三節である。

次は同文献中に引用された『馬瑣傳』（馬太傳）第一章廿一節である。

さんたまりやより御誕生なさるべき若君は。一切人間を諸惡より遁し給ふべき御主にて在ませば。Jsとよび給ふべし。

なほ之より先シャヴィエル一行が日本渡來の際連れて來た彌二郎は、印度のゴアで洗禮を受け、Paulo de Santa Fé（聖なる信仰のパウロ）と稱せられた日本人耶蘇教徒で、この彌二郎がシャヴィエルの日本渡來前彼地において師のためにマタイ傳を和譯したことが傳へられてゐるが、其文献は殘つてゐない。蓋し果してさうであつたとすれば、それはシャヴィエルが日本傳道の用に供するためであつたであらう。この彌二郎はゴアの學林で業を修めたこともあり、無學ではなかつたやうであるけれども、彼がシャヴィエルの著した教義提要を飜譯したものは、原文の意を正しく傳へず識者の嘲笑を買ふ程度のものであつたと言はれてゐるところから見ると、彼のマタイ傳の譯に關しては疑なきを得ない。或はマタイ傳の一部の譯、しかもその大意を日本語で記したものに過ぎなかつたかもしれぬ。

またノイマンの東方アジア史（*Ostasiatische Geschichte*, S. 330 參照）に、新約聖書の譯を西曆一六一三年より以前に京都で出版したとあるのは、慶長十八年（一六一三）日英通商開始の使命を帶びて來航した英國海將ヂョン・セアリスの日記に、當時京都の基督教の學林に新約聖書の和譯が存したと記されてゐる所から出たものであらうが、此日記の記事に關しては、京都帝大の新村出博士が、岩波講座日本文學中の『南蠻文學』において、「それは何かの誤

であらう。カトリックの方では、拉丁語の聖書を株守するのであり又それを日本でも直接讀誦勤行につかふ樣なこともなかつたのであるから、日本譯は在り得べきでない」と言はれてゐるのが當つてゐるであらう。

以上の次第で天主教の宣教師達が日本で活躍した十六世紀の中葉から約一百年間に於ては、舊約又は新約の全體は言ふに及ばず、聖書の纒つた一つの書さへも日本語に譯されたことはなかつたらしく、あちこちの聖句が諸書に引用された程度に留まつたらしい。而してこの方面の檢索のためには東北帝大教授村岡典嗣氏の『吉利支丹文學抄』中の「聖句集」及び「聖書引用句索引」が便利である。

二、海外及び琉球に於ける聖書の和譯

以上の次第であるから、聖書の或る書又は全體の少なくとも現存の譯の歷史は、プロテスタント即ちキリスト教新教關係から始まることゝなり、其中でも先づ海外に於ける聖書和譯の歷史から始まる。キリスト教新教に於て聖書の一部分を初めて譯した人はカール・ギュツラフ（Karl Friedrich August Gützlaff 郭實獵、善德 1803-1851）であつた。ギュツラフ師の事蹟は京都同志社高等商業學校講師重久篤太郎氏の「海外及琉球に於ける聖書の邦譯」（『同志社高商論叢』第九輯、昭和九年一月）中に同氏が種々調査の結果を報ぜられてゐるので、まづ主としてそのなかからその履歷のあらましを記し、後で彼の日本語譯聖書のことをやゝ委しく述べようと思ふ。ギュツラフ師は獨逸プロイセンの生れで、ベルリンの宣教師學校に學んだこともあるが、和蘭傳道會社の東洋宣教師を志し、巴里、倫敦で準備の後、西暦一八二七年、二十六歲にして愈々東洋に向ひ、先づバタヴィアで最初の英和々英字彙の著者たるメドハースト（Med-

hurst）を知つて彼から馬來語及び支那語を學び、間もなくシャムに入つてはルカ傳及びヨハネ傳をシャム語に譯した。而して是は新嘉坡で出版された。其後彼は和蘭傳道會社を離れて、英國倫敦傳道會社の補助を受けることゝなり、一八三〇年代は澳門（マカオ）に在つて南部支那沿岸地方に道を傳へたが、その間に臺灣、朝鮮、琉球に航し、朝鮮ではその民の言葉を學び、琉球ではたま〳〵その港にあつた日本漁船に近づいてキリスト教の書類を頒布したことをその航海日記に自ら記してゐるといふ。彼の琉球來航は一八三二年の八月であつたが、一八三七年即ち天保八年の七月彼はモリソン號に搭乘して日本へ來たけれども、次の事情で上陸はしなかつた。即ちモリソン號は日本はまだ鎖國の當時、力松、音吉などの漂流民七名の送還を機會に日本宣教の目的を兼ねて日本に向ひ、琉球を經て江戸灣に來つて砲擊され次に鹿兒島灣に趣き乘せ來つた日本人を上陸せしめて事情を告げたけれども、日本人さへも留ることを許されずして船に歸された。而して初めから武裝を解いて來て居たモリソン號は、そのまゝ引き返さゞるを得なかつたのである。なほギュツラフ師は、有名な支那學者で倫敦傳道會社派遣のロバト・モリソン（Robert Morrison 馬禮遜 1782-1834）と親交があり、一八三四年モリソンの死後は、ギュツラフ師が其後を受けて廣東香港の英國政廳の役人となり、一八五一年香港で、四十九歳を以て歿した時、彼は同港における英國政廳支那書記官であつたが、官吏生活の間も、彼は傳道の事に力を盡した。例へば彼が前記メドハースト等と協力して漢譯新約聖書を改訂したのは、彼が既に役人生活に入つた一八三五年であり、其後彼は自ら舊約聖書の漢譯を訂正し、且つ自費を擲つて出版もしてゐる。

以上の如く傳道に熱心で、語學の才に富んだギュツラフ師が日本語の幾分を學び知つたのは、天保七、八年（一八三六、七）の頃マカオに於てゞあり、その日本語教師は同地に於ける日本の漂流水夫三名であつた。是等三名の日本水

夫は、ダーロー（T. H. Darlow）及びモール（H. F. Moule）兩氏共編の英國聖書協會所藏諸版聖書目錄の說明によれば、一八三一年太平洋で漂流した日本船の水夫中生き殘つた者が、コロンビア河口に上陸し、カナダを橫切つて遂に倫敦へ渡り、支那へ向けて送還されて、一八三五年の十二月葡領マカオに上陸し、ギュツラフ師の世話になつたものであつた。ギュツラフ師が是等の日本人から學んだ日本語を以て譯したヨハネ傳とヨハネの書翰とは一八三七年即ち天保八年の頃、新嘉坡の米國ミッションの印刷所から出版された。但し原本には年代の記載がなく、一八三七年といふのは前記ダーロー、モール兩氏編の目錄に據つたのであるが、後で紹介する如く、ヘボン博士（Dr. Hepburn）などはその年代を一八三九乃至四十年頃と推定されて居る。（Hepburn のpはサイレントで、この人名はヘバアン又はヘバンと書いて見たところで、どうせ英語の音はそのまゝ出て居ないし、寧ろ古くから言ひならはされた「ヘボンさんでも、草津の湯でも」の書き方に據ることにした。以下言ひならはされた人名の發音はそれに據ることにする。）

ともかく以上の次第であるから、ギュツラフ譯のヨハネ傳が完全な日本語であり得なかつたことは、豫想できるであらう。然し是は聖書の一つの書が纏つて日本語に譯された少なくとも現存の文獻中の最初のものとして尊重さる可きものである。ギュツラフ師の譯したこのヨハネ傳は東京帝大の石橋智信博士も所持されて居るのであるが、私が直接見る機會をもつたのは東京淀橋にある日本神學校に藏されてゐるものである。その本には紙の表紙に貼紙があつて其上にヘボン博士の自筆で（署名はないが、署名ある同博士の他の自筆と全然同書體である）、次のやうに記されてゐる——A copy of the Gospel of John translated by Rev. Dr. Gutzlaff with the assistance of a shipwrecked Japanese and printed on blocks at the press of the A. B. C. F. M. in Singapore about 1839 or 1840——（但しA.

B. C. F. M. は American Baptist Church Foreign Mission の略であり、ヘボン博士とこの譯書との關係は後で述べるつもりである）。次にこの本の扉は黄色で中央上寄りに約翰福音之傳とあり、向つて其右下に新嘉坡堅夏書院藏版左下に善德纂とある。本文は六十枚から成る石版唐紙刷で、題の外は全部片假名である。先づ冒頭には

約翰福音之傳　ヨアンネスノ　タヨリ　ヨロコビ

とあり、第一章の初めは次のやうに譯されて居る——

一節
ハジマリニ　カシコイモノゴザル。コノカシコイモノ　ゴクラクトモニゴザル。コノカシコイモノワゴクラク。ハジマリニコノカシコイモノ　ゴクラクトモニゴザル。

即ち神を「ゴクラク」と言ひ、ロゴス即ち道を「カシコイモノ」と譯し、「カミ」といふ語はあとで聖靈の譯語として用ゐられてゐる。

なほ第三章の十六節は次のやうに譯されてゐる——

ゴクラクセカイノニンゲンヲ　タシカニカワイガル、シトリムスコヲトラシタ、ミナニン　ヒトニゾンジル　クサラヌ。タバシワ　アランカギリイノチヲアルユヱ。

この『約翰福音之傳』と同年に約翰の書翰の同じギュツラフ師の譯が、同じ印刷所から出版されてゐることは前述の通りであるが、ギュツラフ師は新約聖書の全體及び舊約聖書の一部分をも日本語に譯したとのことである。然し約翰傳と約翰書の外は版にはならなかつた。但し約翰傳の初めの二章と『約翰中書』（即ち約翰第二書）を一つにした七葉の小

冊子が一八五四年（安政元）レオン・ド・ロニ（Léon de Rosny）によつて巴里で出版された。ロニは一八六八年（明治元）以來四十年間巴里の東洋語學校の教授として日本語を教へ、彼には日本人の間に知己があり、日本文典及び詩歌選集の編著がある。後者は萬葉の歌九首を初めとして日本歌謠に佛譯と註解とを副へた詞華集である。このロニ出版の前記七葉の小冊子は私は市河博士の藏されてゐるものを見ることができた。なほ昭和四年九月廿七日、東京の某名士の遺書の一部分が大阪で入札された時、其中にもギュツラフ師譯のこの珍らしい小冊子が含まれて居たので、私は豫て知り合ひの大阪某書肆の主人に依頼して競つてもらつたのであるが、私如きものが一冊の古書に投じ得るよりも遙かに高價で、東京の某氏の手に歸した。なほ昭和六年にもやはり是と同じ小冊子が或る書店の古書目錄に出て居るのを見た。價は前の場合の半分であつたが、それでも私は手を出しかねた。

さてギュツラフ師譯の約翰傳は早くも天保十二年ヘボン博士の目にとまつた。即ち當時まだ日本へ來ず新嘉坡にあつた同博士は、或る日印刷所でギュツラフ師譯の『約翰福音之傳』を見て感興を催ほし、米國に送つてニュー・ヨークの傳道會社の陳列館に置かせた。さうして安政六年（一八五九）同博士來朝の際には、他日聖書和譯の時の參考にもと、それを携帶されたが、それが今日日本神學校に傳はつてゐるものであると聞く。かゝる由緒を考ふる時、吾々はヨハネ傳最初の和譯であるのみならず、恐らく聖書の一つの書の最初の和譯は祝福されて、其使命を果し得たと感ぜざるを得ない。

ギュツラフ師と同時頃、やはり海外に於て聖書の一部を和譯した者にウィリアムズ博士（Samuel Wells Williams 衛三畏 1814-1880）があつた。博士はニュー・ヨーク洲の生れで天保四年（一八三三）アメリカから宣教印刷者として

支那に來り、ギュツラフ師とも親交があつた。彼は後米國の支那駐在の外交官となり、晩年には歸國してエール大學の支那語講師ともなつたが、夙に日本傳道に意を注ぎ、支那にあつて先づ日本語を學習し、日本語の活字を揃へることに着手した。ウィリアムズ博士が日本を訪づれたのは天保八年七月で、前記モリソン號に搭乘して來たのであるが前述の次第で上陸はできなかつた。なほ博士は其後嘉永六、七年ペリの艦隊の通譯として渡來したが、日本へ定住はしなかつた。このウィリアムズ博士がギュツラフが約翰傳を和約したのと殆んど同時か、それより僅かに後れて、やはり日本漂流水夫を語學の師として、馬太傳及び創世記を和譯した。さうして博士はその原稿を、將來聖書和譯の時の參考にもと、萬延元年（一八六〇）か其翌年頃ヘボン及びブラオン（S. R. Brown）の兩博士に送つたが、ブラオン博士の家に藏されてゐたその原稿は、慶應三年の火災の際、同博士の家と共に燒失した。かゝる次第でこの譯文を此處に引用することは不可能であるが、ウィリアムズ博士は英語の but を「但し」と同義なりとし、英譯聖書の but をすべて「但し」と譯したので、「但し樣」の異名を得たといふことが傳へられてゐる。なほ博士の聖書和譯を助けた日本水夫は、キリスト新教が得た日本人信者の初めとなつたと言はれてゐる。

次は琉球に於けるベテルハイム（E. W. Bettelheim 伯德令 1811-1870）の聖書和譯の次第である。ベテルハイム博士は勾牙利生れの改宗した猶太人で、英國に歸化し、英婦人を妻とした醫師且つ宣教師であつた。彼が琉球へ來たのは一八四六年（弘化三）の五月であつたが、曾て琉球に來航したことのある英國海軍士官數名によつて組織された琉球海軍傳道會から派遣されたので、恐らく上海から移つたらしく、家族連れで那覇に定住したのであつた。博士は一八五四年（嘉永七）の正月再び上海に赴く迄、約八年間琉球にゐたけれども、傳道は當時官憲の取締が嚴重で思ふ

やうに行はれず、彼の主力は聖書の飜譯に向けらるゝことゝなつた。博士の琉球俗語譯聖書の年代は記錄に一致しない點もあるが、大體嘉永四、五年の頃らしく、安政二年彼の譯した四つの書は、香港において基督教知識普及協會の求めによつて上梓された。なほ博士の事蹟に關しては重久篤太郎氏の前記の一文中に種々興味ある報告がなされてゐる。

さて安政二年（一八五五）香港で出版されたベテルハイム琉球俗語譯の聖書は『路加傳福音書』、『約翰傳福音書』、『聖差言行錄』（使徒行傳）、及び『保羅寄羅馬人書』（羅馬書）の四つの書であつて、私が見たのは市河博士の藏されてゐるものである。（なほ東洋文庫所藏本はこの四つを合綴したものであるとのことである。）扉にはそれ〴〵題の向つて右肩に乙卯年鐫とあり、左下に往普天下傳福音與萬民とある。乙卯は安政二年に當り、左下の文字は私のこの稿の初めに引用した聖句の趣旨に當るものである。右の中路加傳の冒頭を引用すれば次の如くである。

路加傳福音書　〇ロカノヨロコビ　タヨリツタイノショモツ。

第一章

一節　ヲホコノ　ヒトノ　ワツタア　ウチ　マコトニ　シルシ　ナトウル　コト　ツラネ　ノビヨス、カンガエタ　コト、

二　ハジメカラドウシミテ　ミチ　ノビタイル　モノヤ　フツタフニ　ツタイタルゴト、三マタ　ワガ　ヲモテミデフ　ハジメカラ　リヲタイ　イサイニシヒテヲタル、四イヤニ　タツトキテオヒロ　イチ〳〵カキ　イヤガナラタイスヤ　ジツニ　サトシルタメ。

次に安政五年（一八五八）、英國聖書協會の香港駐在通信員が、ベテルハイムの日本語譯路加傳――琉球俗語譯を訂正したもの――に漢譯の本文を對照させて五百部だけ出版した。この事は前記ダーロー及びモール兩氏共編の目錄の中（No. 5803）にも明記されてゐるが、その本の日附は安政二年版と同じく、乙卯年鐫となつてゐる。但し之は香港駐在の通信員が五年版出版に際し、二年版の扉の文字を全部そのまゝ用ゐたものであるらしく、日漢對譯の方は、重久氏が指摘されて居る如く、安政五年の版と見る可きであらう。この版で私の見たのは東北帝大附屬圖書館所藏のものと、日本神學校のものとである。安政二年版は稍細長い感じのする唐本であるが、五年版の方は二年版に比して幅が廣くなつてゐるのみならず、枚數も少し增加してゐる。勿論漢譯が挿入されたゝめである。今安政二年の琉球俗語譯と對照のため、やはり冒頭を引用すれば――

路加傳福音書　ロカ　ヨロコビ　ウトツリヲ
ツタフノ　シヨモツ

第一章

一節　蓋有レ多ー人以ニ我ー中足ー徵之ノ事ー、筆ニテ之ノ於書ニ、乃二本トノ傳レ道ノ者ノ自レ始メ親ク見テ、而ノ授ニ同人ニ。三我レ又參ー五ニ考ー證ノ、次ー第書ニテ之ヲ、達ニ提ー阿ー非ー羅閣ー下ニ、欲ス四爾ガ深ク知セント所レ學ブ之ノ確ー然ッ也。一節

ケダシ　ヲホキ　ヒト　アリ、ワレラガ　ウチ　キワメ　證據セラルノ　コトヲ　モツテ　イチ〳〵　ノビ　シルシ、二ソノ　ハジメ　ヨリ　シタシクミテ　シカウシテ　コトワリヲ　ヲシヘル　モノドノ　ワレラニ　ツタヘタル　トウリニセントスル、三ユヘニワレモ　マタ　ハジメ　ヨリ　コトミナ　マツタク　サトリタリ、イチ〳〵　ナンヂ　タツトキ　テオヒロニ　カヽントスルヲ　ヨシト　ヲモヘテ、四ナンヂガ　マナブ　トコロノ　ジツヲ　シラシメン

この引用文と安政二年版からの引用とを比較すれば、この方が餘程標準日本語に近づいてゐる事が明かである。さうしてこの改正に與つたのはやはり南方支那在留の日本漂流水夫であつたと想像されてゐる。安政五年の路加傳は多少日本に在る宣教師にも送附されたやうであるが、日本における傳道用にはならなかつた。又ベテルハイム博士自らも、その琉球俗語譯の聖書が日本本土の傳道に役立たぬことを覺り、後シカゴで、恐らく藥屋を營みながら、日本人の助けを得て、琉球語譯を改訂して標準日本語たらしめんとした。その日本人が誰であつたかは不明であるが、當時滯米中であつた同志社の創立者新島襄氏などがさうでなかつたかと想像されてゐる。ベテルハイム博士は新約聖書全部を一應琉球語に譯して居たと想像されてゐるが、標準日本語に近く直された三つの書があとで記す如く、彼の死後ウィーンで出版された。博士は前記の如く、琉球から上海に赴き、それから米國に渡り、米國では聖書の譯の改訂と共に、日本本土への渡來を志し日本傳道に要する資金を求めたが、事成らず、一八七〇年（明治三）米國のブルックフィールドで永眠した。然るに其後その未亡人は夫の遺した譯稿を英國聖書協會に提供し、試みに先づ約翰傳を印刷する費用のため四百ドルを支出し、聖書協會はウィーンの東洋學者プフィツマイア教授（August Pfizmaier, 1808-1887）に委囑してその出版を計り、その結果約翰傳福音書及び路加傳福音書は明治六年に、使徒行傳は明治七年に、各々同教授の著書出版所たるアドルフ・ホルツハウゼン（Druck von Adolf S. Holzhausen）から出版された。プフィツマイア教授は柳亭種彦の『浮世形六枚屏風』の獨譯と飜刻で有名であり、アイヌ語文典の編纂者、又萬葉集の歐洲への紹介者である。即ち同教授は一八七二年（明治五年）墺都の學士院紀要第二十一卷に於て、萬葉集の長短歌合せて二百十六首を獨譯して居り、誤譯も多いと聞いているが、私はまだ見る機會をもたぬ。而してウィーン版のこの路加傳

においては、その日本語は安政五年の香港版路加傳よりも一層標準日本語に近づき、香港版の片假名が、少數の漢字交りの平假名文に改められてゐる。又本の體裁は小形となり、活字は草書體である。この版の路加傳は東京の市河博士及び原胤昭氏が藏されて居り、約翰傳は同志社大學の圖書館にあり、幸に私も一本を備へて居る。約翰傳福音書と表題を墨書された白の紙表紙の下に朱色の扉があり、中央に約翰傳福音書の文字が草書體で印刷され、向つて右肩に明治六年癸酉新著、左横に東國宇院城阿度留布保流都方前版摺屋藏活字とある。東國宇院城は Österreich の Wien 城、阿から前迄は Adolf Holzhausen その下は自ら明かである。なほ扉の右下の隅に細字で Japan. S. John. 1873. とある。この版の使徒行傳は聖公會牧師前島密氏の所に一冊、なほ同じく聖公會の故山縣與根二氏所藏のもの二冊が、その息雄杜三氏に傳はつてゐるとのことである。山縣與根二氏は明治九年受洗、十八、九年の頃、日本人としては最も早いディーコンの一人となられたのであつた。

以上の中、今次に『約翰傳福音書』第三章十六、七節を引用しよう。完全な日本標準語にはなりきつてゐないが曩に引用した安政五年の路加傳に似、或は一層標準語に近い譯である。

けだし[十六]神せけんをかのほどあいしてそのひとりうまらすのむさこをすらあたへておよそこれをしんずるものほろばずしてかぎりなきいのちをゑせしむがため。かつ[十七]神そのむすこをせけんへつかはすはせけんをとがさだめするにあらずいましせけんこれをもつてすくはらるがためなり。

但し son の譯語が十六節では「むさこ」となつて居り、十七節の方では「むすこ」と正しく記されて居るが、初めのは誤植であらうと思はれる。

三、開國後の日本に於ける聖書飜譯

前章は海外及び琉球に於けるキリスト教新教々徒による聖書和譯及びその出版の歴史的概要であつた。次には安政開國以來の日本に於ける聖書飜譯の跡を辿つて見よう。

イ、聖書一部分の初期の個人譯

ヘボン博士の言によれば、我が國に派遣された宣教師のうち、S・R・ブラオン博士（Brown）は慶應元年（一八六五）から二年にかけて、福音書の和譯に從事したが、其原稿は前記慶應三年の火災で、ウィリアムズ博士の譯稿と共に燒失した。又タムソン師（David Thompson）は明治二年（一八六九）創世記の飜譯に着手しヘボン博士自身又明治三年以前から四福音書の飜譯に從事してゐたが、是等は直ちに出版迄には至らなかつた（後段參照）。それで日本で出版された聖書和譯の最初のものはアメリカン・フリイ・バプテスト・ミッションの横濱在住の宣教師ゴーブル（Jonathan Goble）の『摩太福音書』である。ゴーブル師は元治元年（一八六四）に福音書と使徒行傳の飜譯に着手し『摩太福音書』は明治四年（一八七一）の秋に出版された。私の見たのは日本神學校所藏のものである。大正十五年東京の米國聖書協會から Aurel 氏の著として出版された『聖書和譯の歴史と聖書協會』と題する小冊子には横濱市役所の市史編纂部にもこの本があるやうに記されてをり、問ひ合せた結果現存することを知つた。ともかく私の見たのは摩太福音書といふ題箋のついた水色表紙の奥ゆかしい裝幀の平假名木板本であり、ギュツラフ師の『約翰福音之傳』の場合と同じくヘボン博士の手蹟で次のやうな説明の貼紙がしてある——The Gospel of Matthew translated by Rev.

Mr Goble of the Baptist Mission in Yokohama, and published on blocks, in 1872.(?) This is the first portion of the Bible published in Japan.

この本の最後には（振假名もそのまゝを記す）

摩太福音書之終

亞米利加之　傳道使　ゴブリ譯

横濱　明治四年七月刻成

と印刷してあるから、この本の木板は明治四年七月には既に完成してゐたわけである。それをヘボン博士が一八七二？即ち明治五年の出版かとされたのは、いかゞなものであらふか。なほこの本の上梓に關しては次のやうな譯者自身の述懷が傳はつて居る。即ち當時木板屋の方では、キリスト教のものを引き受けることは、まだ危險を伴ふ時代であつて、ゴーブル師の場合も横濱では引き受ける者がなく、東京で上木させた。東京の版木屋は恐らく書物の內容を知らずして、引き受けたらしいといふのである。

但し日本へ來た多くの基督教新教宣教師中、特にゴーブル師が聖書和譯出版の最初の人となつたのは、決して偶然ではなかつた。師は夙に、傳道地としての日本に興味をもち、提督ペリが日本へ來た時、視察の目的を以て其一行に加はり、歸國後日本へ派遣されんがために、神學校に入つて勉强し、萬延元年（一八六〇）に愈々日本への宣教師として、神奈川に上陸したのである。さうして其時師は日本の漂流水夫仙太郎をも伴ひ來つたのであつた。なほゴーブル師は既に明治元年にローマ字馬太傳の出版に取りかゝつたが、是は完成しなかつた。

明治四年上梓のゴーブル譯『摩太福音書』の大體を窺ふため、二ケ所から引用しよう。初めは第五章五節以下の數節である。

5にうわの　ものは　さいわい　じや　けだし　その　ひと　せかいを　そうぞく　せやう　ぎを　したい　うゑ
かつゑるものは　さいわい　じや　けだし　そのひと　みちませう　7めぐみある　ものは　さいわい　じや　けだ
し　その　ひと　めぐみを　うけやう　8こゝろに　おいて　きよき　ものは　さいわい　じや　けだし　その　ひ
と　神を　みやう。

次は六章九節以下の「主の祈」である――

9それゆへ　あなたは　かう　いのるべし「てんに　います　われらの　ちゝや　みなを　たふとませ　たまへ　あ
なたの　ごせいじ　なされ　あなたの　おぼしめし　てんに　ある　ごとく　ちにも　なさしめ　たまへ　われらの
ひゞの　めし　こんにちも　われらに　あたへ　たまい　かつ　われらに　ひきおいある　ひとを　われらが　ゆ
るす　ごとく　われらの　ひきおいも　ゆるし　たまへ　われらを　そゝのかしに　さそひ　たまはず　たゞ　わ
れらを　あく　より　たすけ　たまへよ」

ゴーブル師とN・ブラオン師の平假名新約聖書との關係は後で述べるつもりである。

なほゴーブル師は恐らく最初の讃美歌和譯者でもあつた。師は今日の『さんびか』三百五十番「あまつみくには　たのしきぞ　きよきともがら　うちつどひ……」の原歌 There is a happy land, Far, far away, Where saints in glory stand, Bright, bright as day.…… を「よいくにあります　たいそう　えんぽう　しんじやは　さかえて　ひ

かりぞ……」と譯したとのことであり、之は明治六年より以前のことであるといふ。

尙ヘボン博士自身の言によれば、同師は明治三年（一八七〇）以前から、奥野昌綱氏の援助によつて、四福音書の飜譯に從事され、なほそのうち馬可、約翰及び馬太の三書は奥野氏の助けにより、同博士とS・R・ブラオン博士とが共に改訂されたとの事で、明治五年の秋には、馬可傳と約翰傳とが出版され、翌年の春には馬太傳が出版された。さうして是等の中約翰傳をローマ字で書いたものが *Yohane no Fukuin* として明治六年ニュー・ヨークで出版された。

ロ、新約全書の共同飜譯

以上は蓋し個人の企圖により、應急のために作られた譯であつたが、やがて共同の事業として、新約聖書全體の飜譯が着手さるゝに至つた。即ち明治五年（一八七二）九月廿日基督教新教各派の宣教師十四名が横濱に會合し、米國聖書協會の事業として、新約聖書和譯のことを議決した。その結果先づS・Rブラオン、J・Cヘボン、D・Cグリーンの三博士が委員に擧げられた。S・Rブラオン師はダッチ・リフオームド派の宣教師で、讃美歌の作もある歌心ある婦人を母親とする好學の士であり、醫師で長老派の宣教師であつたヘボン師については、前にも記したが、師は明治廿五年米國に歸り、四十四年九十七歳の高齢を以て他界じた。又グリーン師は組合派の宣教師で、後で述ぶる如く聖書改譯にも關係されたので、明治四十年代、私は、青山學院神學部の學生であつた頃、その學者らしい溫容に他所ながら接する機會を屢々有したのであつた。斯くて明治七年三月廿五日（この日附は基督教年鑑に據つたのである、他の文獻中には同年六月とあるのもあるが、是は委員の全部揃つた上の日附である）を以て、愈々新約聖書の和譯は着手された。（飜譯委員としては前記三名の外、其後R・S・マクレイ、N・ブラオン兩博士、ヂョン・パイパア及びラシ

アン・チャーチ・ミッションのニコライ・カサトキンの諸師も加つたが、N・ブラオン博士は約一年半の後、辭して單獨に飜譯を繼續し、其他も、後で加つた委員は大抵種々の差支のために飜譯委員の會合に列することができなくなつた。但し英人パイパア師は後で記す如く、聖書和譯の恩人の一人となつた)。さうして此飜譯事業の結果として、明治八年八月に先づ路加傳が出版された。(同じく明治八年には「耶蘇教正學入門」と題し、主の祈、使徒信經、並にモーゼの十誡の和譯に其年の安息日表を加へた一枚刷のものが出來て居るが、是も飜譯委員の手に成つたものである。)それから明治九年には羅馬書、十年には馬太傳、馬可傳が發行された。(但し前記英國聖書協會所藏聖書目錄の日本關係の部を見ると、明治九年(一八七六)に日本人飜譯者(複數)による馬太傳が東京の十字屋から出版されたとあり、新約聖書飜譯委員の手に成つた明治十年の馬太傳(改訂譯)の先驅をなしてゐることがわかる)。爾來飜譯の事業は次第に進み、腓利門、雅各、彼得前後書、猶太、哥羅西の諸書並に默示錄が明治十三年(一八八〇)四月に出版(但し前年七月に譯は完成してゐた)さるゝに及んで、新約聖書全體の日本語譯が完成した。さうしてその完成の祝賀會のあつた同年四月十九日は、恰も片岡健吉氏が國會開設の請願を太政官に提出した後二日であつた。聖書の譯は奥野昌綱氏が美はしい手蹟で版下を書かれ、福音書などは各一冊とし、書翰の薄いものは二三書合して一冊として印行された。さうして價は一冊十錢から四錢位であつた。是等分冊本は、一冊物の新約聖書ができた後も、暫くは用ゐられた。

日本側で新約聖書飜譯の仕事に携はつたのは、主として奥野昌綱、松山高吉兩氏、それに高橋五郎氏がブラオン師の日本語教師であつたので、氏も亦自ら之に與つたのであつた。又杉本、三輪の兩氏も一時補佐され、當時未だ若か

つた井深梶之助氏も蔭で手傳はれたやうである。『福音新報』第一〇八八號に載つてゐる井深博士の談話は、當時の有樣を髣髴せしめるものがあるので、左に其一節を引用しよう。

「飜譯委員は、日曜日土曜日の外は、毎日午前九時から十二時まで會合して、委員の一人が先に起草した所の飜譯に就て、評論採決した。或時は半日懸つて漸く壹節、貳節を決定した事も、稀ではなかつた樣である。會合の場所は横濱山手二百二十一番ブラオン博士住宅の東南の一室で、室の中央に一脚の丸テーブルがあつて、その周圍に三人の飜譯者と、三人の補佐役とが夫々着席して、討論したのであるが、そのテーブルの上に開いてある書物は、ブラオン氏とグリイン氏の前には、二三種の希臘原文の聖書、ヘボン氏の前には英譯の新約註解書、日本人の前には文法や官話やその他の支那飜譯の聖書といふ風であつた樣に記憶する。然して、ブラオン氏の補佐が高橋氏、ヘボン氏のが奥野氏、グリイン氏のが松山氏で、時としては隨分議論に花が咲いた事もあつた樣である。自分は當時ブラオン先生の内に書生をして居て、屢々會合の席に出入した許でなく、未熟ながら、先生の使徒行傳の飜譯の手傳ひをもしたので、四十餘年後の今日、當時を追想すれば、六人が丸テーブルを取圍んで、議論を上下して居る光景は、目に見えるやうな氣がする。」

なほ井深博士の言によれば、この新約聖書和譯の正本とされたものは、ヂェイムズ王欽定譯として知られてゐる英譯聖書の希臘語原本であり、從つて日本譯聖書は英譯からの重譯ではなくして、希臘原文に據つたものである。又譯文は漢字でなく、振假名を本文と定め、日本人補佐役が動もすれば、支那譯に信頼して、漢文口調に傾かんとするに對し、ブラオン博士は出來得る限り、通俗的に心懸けられたとの事である。殊にグリーン博士は假名を本體として、

讀みにくい所だけ、小さい漢字を横につけようとしたと、別所氏に語られたとのことである。現に私の所にある「飜譯委員社中、米國聖書會社發行」の『またいでん』(明治十一年横濱上梓)などは全部平假名で所々單語の向つて右に漢字が配してある。蓋し松山氏の言によれば、和譯新約の文體は同氏及び奥野氏の主張に、ヘボン博士が贊成されて定まつたとの事であるが、日本人補佐役が支那譯を參考にしたのは言ふ迄もないことであるので、松山氏のこの言と井深氏の言とは兩立し得ないものではない。

なほ此飜譯の委員長であつたS・R・ブラオン博士が、殆んど此新約聖書和譯の完成と共に、其地上の一生を終られた事は、特に記憶さる可き事柄である。博士は最後の默示錄の和譯が終り、その訂正にかゝらんとする所で、明治十二年の夏病を得て米國に歸り、幸に和譯新約全書を手にするを得たが、其後數日で病革り、一八八〇年即ち明治十三年、七十歳で此世の生を終られた。

尙さきに單獨で新約聖書の和譯に從事した事を記したN・ブラオン博士は飜譯委員の譯した新約聖書が完成する數ケ月前(明治十二年)に平假名の新約聖書を完成して出版した。但しN・ブラオン博士は早くも明治六年(一八七三)ゴーブル師の聖書平假名和譯事業に合流し、その後新約聖書の平假名和譯は、ブラオン博士によつて繼續せられたのであつた。東京の七十路會所藏本の中に、聖書の譯の慣例として譯者の名は記されてないが、N・ブラオン博士の譯とされてゐる『末津太之天無』(馬太傳)があり、本の中には年代が記されてゐないが、表紙の貼紙に明治七年の版と記されてゐる。さうして此本では、平假名本文の向つて右脇に所々ローマ字が配してある。ローマ字は大體振假名的のものであるが、往々聖經異本の語句の考證もある。又平假名の脇に漢字を配した例も少數ながら目にとまる。例

へば「だい十四しやう」二五節の「しかう」の脇に「四更」の二字が配され、この場合は「四更」の下にローマ字でsanji yori yoake made と註してある。然し是は寧ろ特例である。なほ同博士譯の馬可傳と雅各書は明治八年に出版され、爾來同博士の新約聖書飜譯の事業は着々進み、明治十二年に完成したのである。但し前記七十路會所藏本で、同博士の譯とされてゐる『まこでん』（年代の記載はないが、明治十年の版とされてゐる）には平假名の脇にローマ字は見當らぬけれども、なほ所々漢字が配してある。然し後ではその漢字も省かれて平假名の本文のみとなつた。而して同博士の飜譯を助けたのは川勝鐵彌氏であり、その平假名新約は明治十九年にブラオン博士が長逝される時迄に一回以上改訂せられ、その死後の改訂はA・A・ベネット氏の監督の下に川勝氏によつてなされた。なほ明治十八年頃W・J・ホワイト及びS・鈴木の兩氏によつて、N・ブラオン師の平假名テキストを、漢字交りに書き代へられたものがアメリカン・バプテスト・ミッションから出版され、その後多くの版を重ねた。N・ブラオン博士の平假名新約の初版は東京淀橋の前記日本神學校に在る。且つ博士は之よりさき、ビルマとティベットに接してゐる英領印度のアサム人のためにも、新約聖書をその民族の言語に譯したとのことである。バプテスト教會にはなほ其後の聖書の譯もあるが、それに就ては後段の和譯聖書改譯の項で述べるつもりである。

飜つて思ふに、切支丹禁制の高札は、明治六年迄撤廢されなかつたとの事であるから、明治七年に新約聖書の和譯が着手されたのは、高札撤廢と殆んど同時であつたのである。然し高札は取り去られても基督教はまだ公然と許可されたのではなく、種々の反感や困難が殘つて居た。且つその外、飜譯委員は日本の國語問題で大困難をした。日本の國語は今日でもまだ問題が全く解決したわけではないが、當時は一層渾沌たる有樣であつた。從つて斯る內外の困難

を排して、あれだけの立派な飜譯ができたのは、信ずる者には、實に大いなる神の攝理であつた。

なほ純粹な聖書の譯ではないが、註解の古い例として別所梅之助氏（終の參考文獻目錄を參照されたい）の擧げて居られるのに次のやうなのがある。即ち明治八年には米國嘉魯日耳斯の略解新約聖書馬太が出て居り、十二年には馬太傳の註解が「米國遣傳教使事務局」から發行され、「大日本神戸上梓」とあるとの事である。

ハ、舊譯全書の共同飜譯

新約聖書の和譯がまだ進行中であつた明治九年（一八七六）十月三十日、東京に在住する新教各派の宣教師は築地に會合し、横濱の新約聖書飜譯委員と協力して舊約聖書を和譯することを決議し、其結果ウォデル（Hugh Waddell）パイパア（John Piper）、タムソン（David Thompson）及びカクラン（George Cochran）の四氏が飜譯委員に擧げられた。以上の中初めの二人は英國人、タムソンは米國人、カクランは加奈人であつた。而してこの委員は翌年創世記の最初の三章の譯を出版した。此創世記はタムソン師が譯したものを、委員一同が訂正したものである。なほその翌年にはこの創世記の十一章迄が出版された。次に掲ぐるは明治十年版の創世記（三章迄）の冒頭の三節である——

一　元始に神天と地を創造れり　二　然て地は形なく空しかりき闇きは淵の面の上に在しが神の靈水面の上に掩ひ居たり

三　神明りなれといひしに明りなりき

明治十一年の版では多少の改訂が試みられてゐるが、以上引用した部分では「水」と「掩」の振假名がする、おほと直してある外は同一である。但し十一年版は十年版より凡て活字が小さくなつてゐる。

又明治十一年には約拿書も出版されてゐるが、是はパイパア師の試譯らしく、尙同師譯の約拿、哈基、馬拉基の三

書は、次に記す常任委員の手を經て明治十四年（一八八一）に出版された。パイパア師以外にも多少の譯稿ができて居たらしい。蓋し是よりさき、明治十一年五月基督教新教の宣教師が東京に會合して、新たに舊約聖書飜譯の計畫を立てた結果、舊委員はそれ迄の仕事の結果を新會合によつて定められた常任委員（The Permanent Committee on the Translation, Revision, Publication and Preservation of the Text of the Holy Scriptures）即ちJ・C・ヘボン、S・R・ブラオン、R・S・マクレイ、D・C・グリーン（以上米國人）及びヂョン・パイパア（英國人）の諸氏に讓り渡して解散した。舊約聖書飜譯の新計畫では其完成を速かにするため函館、東京、横濱、新潟、神戸、大阪、京都、長崎の各地に居る宣教師を地方委員として、舊約聖書の飜譯を分擔せしめ、其原稿を中央に送附することゝした。而してその間常任委員は、既に出來た日本文新約の後の方の部分（明治十二、三年出版の部分）を訂正し、其後日本文新約全體をも奥野昌綱氏の助けによつて多少訂正した。さうして是が、改譯のできる迄、日本文新約聖書の、少なくとも基督教新教の標準テキストとなつたのである。前記舊約飜譯の地方委員から、擔任の譯の原稿を中央に送り、それに訂正を加へて出版されたものがないではなかつたが、概して地方委員制度は應ずるものが小數であつたゝめに成功せず。明治十五年に至り、フルベッキ（G. F. Verbeck）、ファイソン（P. K. Fyson）及びヘボン三氏を飜譯兼訂正委員として事業の完成を計ることゝなつた。以上三人の中ヘボン博士のことは既に述べた。我が國でフルベッキさんと呼びならはされ、我が政府からも重用され幕末明初の日本學術上に多大の貢献をした Verbeck 師はオランダ人で、グッチリフォームド派の宣教師として日本へ來たのであるが、彼が來朝の動機となつたのは前記ギュツラフ師が香港英國政廳支那書記官時代、一八四九、五〇年（嘉永二、三）にかけて歐洲諸國歴訪中、和蘭でなした東洋宣教の演說を聽いたこ

とであつたといふ。ファイソン師は英國教會の人で、後同派の教會の北海道の監督になつた。明治十七年には松山高吉、植村正久、井深梶之助の三氏が日本人側からの飜譯委員として事業に參加することゝなり、松山氏の言によれば植村氏は以賽書(イザヤショ)の譯に、松山氏自身は詩篇の譯に、特に關係が深いとの事である。なほ訂正の仕事の方でも日本人の助けを要したのであるが、之には松山高吉、高橋五郎の兩氏が當たられた事をヘボン博士が述べられてゐる。斯くて舊約聖書の日本語譯は明治二十年(一八八七)を以て終り、翌年公認和譯聖書(是に含められた新約のテキストは明治十七年版のものである)が出版された。但し舊約聖書和譯の費用は英國聖書協會とスコットランド聖書協會及び米國聖書協會とが負擔したのであつた。

日本譯聖書が一通り出來上る迄の中繼をなしたものは、漢譯に訓點を施した所謂訓點聖書であるが、日本語譯聖書ができるに及んで聖書會社は訓點聖書の出版をやめた。

四、和譯聖書の改譯

前記の如くにして、和譯聖書は完成した。而して其結果は、文體においても一種獨特の風格を備へた立派なものであつた事は茲に記す迄もなく既に認められてゐる所である。然し生きた國語は變化し成長する。殊に聖書の和譯が完成して以來、日本語の變化發展は非常なものであつた。それで和譯聖書完成後、時日を經るに從つて改譯の必要を生じたことは以上の意味においても當然であつたが、聖書改譯必要の原因はなほ他にもあつた。即ち世界における聖書研究の長足の進歩は、その結果を取り入れた改譯の出現を促したのである。米國において舊約聖書の原語希伯來語を

研究した淺田榮次氏が『六合雜誌』に一文を寄せて、「和譯聖書訂正の必要」を叫んだのは明治二十五年であつたが、聖書改譯の事業も、初めの和譯の場合と同じく、各派共同で企圖される前に、先づ個人的又は私的の試みから始められ、さうしてかゝる試みは合同事業としての改譯が着手された後も止むことなく、今日に及んでゐる。

イ、私的及び個人的事業としての聖書の改譯

明治三十七年の頃內村鑑三、植村正久、小崎弘道、柏井園の四氏が相謀つて、聖書の改譯を企て、其結果柏井氏は約翰傳の譯を起稿したりしが、やがてこの計畫は中止された。又宮崎八百吉氏には羅馬書の譯がある。然し個人的企圖としての聖書改譯において最も注目すべきは、現在の青山學院神學部教授左近義彌氏の事業である。同教授の改譯は聖書の原語そのものゝ詳細なる研究に基いて居る點、並に同教授が聖書改譯を以て畢生の事業とせられて居る點等において、特殊の意義と價値とを有するものである。同教授はその聖書改譯の經緯を知りたいといふ私の希望に應じ昭和五年九月自ら其經過及び將來の豫想を記して私に送られたのであつた。それによれは左近氏は明治二十年南米ブラジル移民を望んで渡米されたが、事成らず、其後なほ曲折を經て、聖書の邦語譯に志されるやうになつたのであるが、以下同教授の手記をそのまゝ誤りなき事實を傳へたいと思ふ。

以上の次第で「失望の際、英譯聖書を讀み（明治二十一、二年ニウヨルクにて）基督教を信ずると同時に、聖書の邦語譯を志し、自活しながら聖書の新舊兩約の原語を學び、明治三十九年ニウヨルクより羅馬書の飜譯を送つて內村氏の聖書の研究誌に揭げたのが、日本にて聖書改譯の烽火となり、明治四十年の秋、歸國、同四十年『マタイの傳へし福音書』を博文館より出し、同四十二年『詩篇』を出し、その出版費百圓の借金返却に六年間苦しみ、明

治四十四年、高田集藏氏より百圓もらひて、『創世記』を出し、大正三年知人より千圓もらひて『耶蘇傳』（四福音書）を出し、大正八年、自費にて『耶蘇教の初代』（使徒行傳）を出して、今は無一文。

右の年間に時々雜誌（宗教）等にパウルの書翰を二三公にした。

しかし是までの出版は、いづれも試譯にすきぬ。今後聖書六十六卷全部の飜譯は、玆に未定稿のもの（ダニエル書七章）にて見らるゝごとく、逐語譯を上段に邦語譯を下段にして、研究者の便を計りおく。たゞパウロの書翰は候文にするつもり。昨今はダニエル書と默示錄との飜譯が終つたので、逐語譯と邦語譯とを並べる爲に訂正もし、淸書もしてる。それの終り次第、昭和八年か九年頃までにとて、ダニエル書と默示錄との註釋を書きかけてをる。このダニエル書默示錄の註釋さへ濟めば、專心聖書の飜譯に從事する。このダニエル書と默示錄とをのぞき、他の六十四卷の譯全部を是非十五年か二十年で、仕上げたいものと祈つて居る。右の註釋にしても、改譯にしても、金のなきため、出版の見込みなし。」

左近教授の改譯は前に記した通り、聖書の原語の研究に基づき、且つ同教授の信賴さるゝ歷史的研究の結果に據られたもので、聖書の精緻なる研究に志すものにとつては、非常に興味深く、有益なものである。今その一例として、詩篇第十九篇の前半の譯を次に揭げよう。蓋し詩篇中には「詩體も・時代も・詩人も　違へる二以上の詩が　禮拜用の爲に諸の詩集編纂者の手で混成せられたものがある」（左近教授『詩篇』緒言一六頁）が、此一篇はその一例であつて、後半は前半とはちがつた部に屬す可きものである。次に記すこの詩篇第十九篇の前半は、譯語に於ては、言ふ迄もなく、優れた在來の和譯を參照されつゝ、しかも原語に即せんとした教授の飜譯振を示すものである。

天は　エルの榮光を　語り、
大空は　その手の業を　告ぐ。
晝は　晝に　言を　傳へ、
夜は　夜に　知識を　授く。
彼等の聲は　全地に　亘り、
彼等の言は　世界の極に　及ぶ。
天幕は　日の爲に　其處に　設けられ、
日は　新郎の如く　その覆より　出で、
丈夫の如く　喜びて　その道を　走る。
その昇るや　天の極よりし、
その巡るや　天の端に　到り、
物として　その日より　隱れたるは　無し。

なほ左近教授の今後の譯は、前に引用した手記にも其計畫を記され、私に示されたダニエル書の試譯でもわかる通り、原語の忠實な逐語譯を上段に、邦語譯を下段に記されたもので、聖書の理解を助くる上において、實に意味深きものである。私は斯る有意義なる事業に對し、理解ある後援者の出でん事を衷心から祈るものである。

バプテスト教會の和譯新約聖書のことは後で記す。

尙この外にも原語の知識に基づいた新約聖書全部又は一部分の個人的改譯の注目す可きものがあるが、出版の年代が比較的遲いので次の項で述べることにする。但し聖書のせめて一部分を標準譯よりももつと平易な日本語に書きかへようとすることは、早くから內外人によつて試みられてゐる。明治十四年英國聖書會社橫濱印行の『馬可傳』に、表紙の題名を記した一葉に別活字で「俗話」(「俗語」となつてゐる版もある由)とあり、これは「神の子イエスキリストの福音の始でござります」といふ文體の譯があるとのことである。J・L・アママン(Amerman)氏が石本氏の助けを得て成就した平易な日本語の馬可傳は明治廿一年(一八八八)に初版を出し、其後數版を重ねて居り、明治廿九年の Susan Ballard といふ婦人の創世記の拔萃も平易な譯である。言文一致體では、明治四年のゴーブル師の譯が先づその傾向を示してゐるが、明治三十四年(一九〇一)にはブレイスウェイト師(G. Braithwaite)の馬太傳(初めの四章)の言文一致譯が、橫濱福音印刷所から出て居る。

ロ、各派合同事業として聖書の改譯

以上は個人或は少數の個人團體によつて企てられた聖書改譯の歷史を明治三十年代迄辿つたのであるが、明治四十年代の初めに基督敎新敎各派合同事業としての改譯が着手されるに至つた。蓋し本稿中、舊約全書の共同飜譯の項に記した如く明治十一年五月に定められた常任委員の名稱が The Permanent Committee on the Translation, Revision, Publication and Preservation of teh Text of the Holy Scriptures であつたことは、既にこの時から將來における合同改譯の必要を豫想してゐた事を示すものである。即ち各ミッションから一名づゝ擧げられる委員がアメリカ聖書協會及び英國聖書協會の代表者と共に、聖書の飜譯、改譯、出版、保存に當るやうになつてゐたのであるが、其後曩に述

べたやうな次第で聖書改譯の必要が次第に迫つて來たので、明治三十九年七月には新約聖書改譯のことが議され、四十三年には改譯についての規則も制定されたとのことである。各派合同での新約聖書の改譯はかくして愈々着手されるのであるが、その詳細はその日本人側改譯委員の一人となられた別所梅之助氏が日本メソヂスト教會の機關雜誌『教界時報』の大正十一年八月四日發行の號から九月十五日號に亘つて寄せられた「新約書の飜譯について」の主要部を成してゐる。私は今それによつてその改譯事業進行のあらましを傳へることゝする。

この聖書改譯委員會の第一回の會合は、明治四十三年三月十二日、神田美土代町の基督教青年會館内で開かれた。この委員の定員は外人宣教師四名、日本人四名、外人側は D・C・グリーン博士（組合派）、H・J・フオス監督（監督派）、C・S・デーヴィソン氏（メソヂスト派）、及びダンロップ氏（長老派）であつたが、日本人側で當日迄に決定してゐた委員は松山高吉氏（監督派）と別所梅之助氏（メソヂスト派）の二人のみであつたので、同日大阪の牧師川添萬壽得氏と京都の教授藤井寅一氏が委員に擧げられた。越えて四月十三日の朝、委員は靈南坂の組合教會の牧師館、小崎弘道師の書齋を借りて會合したが、藤井氏はこの日早や出席せられた。この日委員はマコ傳第一章の初めの四節を譯した。先づマコ傳の譯に取りかゝつたのは、別所氏が一委員と記されてゐる恐らく別所氏自身の提案が採用されたのであり、文體は經驗に富む松山翁の意見に委員が大體賛同して方針を定めたものであるとのことである。なほ原本は定本とすべきネッスル博士の校訂本が未着のため、初め暫くはウェストコット、ホートに據つたとの事である。その後委員達個人の家々をめぐつて會合を續けてゐたが、五月に入つて青山學院神學部の一室を會場として借りることゝなり、川添氏も其中に上京され、六月十四日から委員の總會を開き得るやうになつた。然しダンロップ氏は北陸傳道

が手離されなくて委員を辭せられ、デーヴィソン氏も凡そ一年の豫定で歸國されることになつたので、バプテスト派のC・K・ハリントン博士の援助を賴み、後博士を正員とした。

右總會の際配布せられた規定には、次の條項もあつた。

第三條　現行和譯聖書を改譯するに當り、本委員會は、大英國及び外國聖書會社の發行せるネッスル博士校訂の本文に從ふべきものとす。尤も特殊の章句につきては、ギリシヤ語に通ずる委員三分の二以上の同意により、改正英譯の採りたる本文を以て、之に代ふる事を得。

第四條　本委員會は、また改正英譯のとりたる解釋に從ふべきものとす。最近の學匠の示す所に基き、三分の二以上の投票あるにあらずば、異なる解釋を採るべからず。

なほ文體をむづかしからぬ時文體とすること其他あらかたの方針も定まつたので、秋からはフォス、松山の兩先輩は神戸、その他の諸氏は東京と、大體分れて仕事を進めた。

マコ傳福音書の初稿が書き上げられたのは明治四十四年一月廿五日であつたが、其後訂正を經て六月の末に之を出版し、識者の意見を問うた。出版されたのは三千部で、故本多庸一、星野光多二氏の序の外、委員長グリーン博士の序があつた。現行改譯聖書の中のコマ傳はこの時出版された譯文になほ訂正を加へられたものである。之より先一月下旬の總會でハリントン、川添、別所の三氏はマタイ傳、グリーン、藤井の二氏はルカ傳、フォス、松山の二氏はヨハネ傳と、それ〴〵分擔して原案を作り、稿成るに從つて全委員で調査し、訂正する事となつた。この案の進行中、藤井氏はグリーン博士と共に擔任のルカ傳の稿が成り、全委員で訂正中、大正元年三月委員を辭して鄉里熊本に歸ら

るゝことになつた。又翌大正二年九月には委員長グリーン博士が長逝され、翌三年の一月からはラーネッド博士が委員會に列せられた。別所氏の記さるゝ所によれば、現行聖書を原案として、ネッスル本に照して訂正するといふ初めの計畫も、著手して見ればそのまゝには出來難く、類語の區別、地名人名の書き方等にも種々の苦心があつたやうである。斯くて大正六年二月廿四日改譯委員は新約聖書改譯の筆を擱き、改譯新約聖書は同じ年の十月に公にせられた。前の譯が完成して後、實に三十七年であつた。但しこの改譯の費用は、日本國内に代表さるゝ三つの外國聖書會社が負擔したのである。

別所氏は「舊約書改正の要あるのみか、時勢は大正六年の新約書をも、何年かの後には更に改正せしむるであらう。私は新なる人の起たんをまつ」と記されてゐるが、大正六年の改譯が種々の長所を有してゐる事は言ふ迄もなく是が今や日本全國の基督教新教の教會で在來の譯に代へられてゐるのは理の當然である。試みに「主の祈」の新舊兩譯を對照すれば次の如くである。

在來の譯

天に在ます我儕の父よ願くは爾名を尊崇させ給へ爾國を臨らせ給へ爾旨の天に成ごとく地にも成せ給へ我儕の日用の糧を今日も與たまへ我儕に負債ある者を我儕がゆるす如く我儕の負債をも免し給へ我儕を試探に遇せず惡より拯出し給へ國と權と榮は窮りなく爾の有なればなり　アメン

改譯

天にいます我らの父よ、願くは、御名の崇められん事を。御國の來らんことを。御意の天のごとく、地にも行は

れん事を。我らの日用の糧を今日もあたへ給へ。我らに負債ある者を我らの免したる如く、我らの負債をも免し給へ。我らを嘗試に遇せず、惡より救ひ出したまへ。

以上の二つの譯を比較して誰しも先づ氣づく點は、改譯の方では漢字がかなり少なくなつてゐることであらう。なほ改譯の方は原語の措辭に一層近く、テンスに至る迄原文のまゝを表はさうとして居ることも見える。又在來譯にある最後の句が、改譯では省かれてゐることも注意を惹くであらうが、此點は改譯聖書が初めてといふわけではなく、ローマ派の加持力教會では古くからこの句のない聖書の本文を使用し來つた事は、初めに引用した『ドチリイナ・キリシタン』中に含まるゝ「主の祈」の譯文に徵しても明かである。而して改譯委員が是を省いたのは、惟ふに新約聖書古寫本の比較研究の結果到達せられた聖書學者の結論、即ち此句を含まぬ本文が最も信賴すべきもの、即ち此句は後の追加であるといふ結論に據つたものであらう。

バプテスト教會のN・ブラオン博士の平假名新約聖書のことは前に記したが、同教會では明治三十四年(一九〇一)にまた和譯新約聖書を出版した。是はF・G・ハリントン師の譯で、釧路氏が助けられたとのことである。

ハ、その後の個人譯

聖書個人改譯の新らしいものでは、昭和三年(一九二八)四月に出版された永井直治氏譯の『新契約聖書』がある。是はエフ・スクリブナの校正によるロベルトス・ステファヌス第三版ギリシヤ文を基本としたもので、永井氏二十年間の努力の結果であるとのことである。昭和四年十月には上澤謙二氏譯の『子供の聖書』の出版が開始された。是は改譯新約聖書を子供に解りよく書き直すことを目的として逐次刊行されつゝあるものである。又その翌年から山谷省吾

氏は『新約聖書・新譯と解釋』において、口語譯を試みつゝある。東北帝大の土居光知教授の舊約聖書雅歌の譯及び湯淺吉郎翁の同じ書の譯は異なれる意味において注意すべきものであるが、是等に就いては後で記すつもりである。なほ聖書の或る書を平易な日本語に譯したそれ〴〵特色ある試みとしてはウェインライト氏（Dr. Wainwright）、塚本虎二氏、青山學院の松本教授、牧師高柳伊三郎氏等のものがある。今次に塚本氏主宰の『聖書知識』の第五十三號（昭和九年五月發行）に掲げられた同氏の譯の一部分を紹介しよう。マタイの福音書第五章の初めの「八福」である。譯文中の細字は譯者塚本氏の註解的敷衍である。（引用には節の番號を省く。）

イエスは、多くの群集が自分に隨いて來たのを見て、山に登り給うた。そしてそこに坐り給ふと、弟子達が彼の許にやつて來た。彼は口を開いて〔斯く〕言ひながら彼等に教へ始め給うた——

幸福なのは、神の助なしに生きられぬ靈の貧乏人達である。
　天の王國はその人達のものであるから。
幸福なのは、義しいことの爲に悲しんでゐる人達である。
　最後の日に神に慰められるのはその人達であるから。
幸福なのは、柔和な人達である。
　最後の日にこの地を相續するのはその人達であるから。
幸福なのは、義しいことを求めてそれに飢ゑ渴いてゐる人達である。
　最後の日に神に滿腹させられるのはその人達であるから。
幸福なのは、憐憫深い人達である。

最後の日に神の憐憫を受けるのはその人達であるから。

幸福なのは、心の清い人達である。

最後の日に神を見るのはその人達であるから。

幸福なのは、地上に平和を作る人達である。

最後の日に神の子と呼ばれるのは【その人達】であるから。

幸福なのは、義しいことの爲に迫害された人達である。

天の王國はその人達のものであるから。

次に前に一言した湯淺吉郎翁及び土居光知教授の舊約聖書雅歌の譯に就いて記すことゝする。『十二の石塚』を以て明治新體詩の歴史に大なる足跡を印せられてゐる湯淺吉郎翁は、嘗ても舊約の邦譯を試みられたが、今や方針を一新し、日本語の新らしい詩形を創造する意氣込みを以て、先づ雅歌の舊約原語からの譯を『基督教雜誌』(東京、湯淺與三氏發行)の創刊號(昭和九年九月發行)以下に掲載された。この譯は「和譯の雅歌より後人の追加したる註釋說明書入を取除き、改譯したる愛歌集」である。その譯風の例として第六、七編(雅歌 第二章第八節から十五節)を示せば次の如くである。(『基督教雜誌』第一卷第三號(昭和九年十一月發行)に掲載、數字は雅歌第二章中の節を示す)——

第六篇　愛の春潮

女

八　聽けよ私の愛人來たる、
　山の峰をば跳び越えて、
　岡の上をばおどり越ゆ。
九　壁の背後のかれを見よ、
　窓より家の內を窺がひ、
　格子の隙間のぞきこみ、
十　愛人私しに斯う言ふた。

男

　起きよ我戀人とく起よ、
　美はしき者出で來たれ。
十一　視よや冬はすでに過ぎ、
　雨期明けて空晴たれば、
　寒さも最早立ち去つた。
十二　野山は花におほはれて、
　若枝刈込む期節は來り、
　山鳩の鳴く聲は聞ゆる。

十三無花果樹の果は赤らみ、
葡萄の蔓も花咲き初て、
其馨はしき清香を放つ。
起よ我戀人わが野鳩よ、
十四青葉陰れの岩間の穴に、
獨隱くるゝわが馴鳩よ、
聲を聽せよ姿を見せよ、
汝の音聲は最愛らしく、
汝の顏貌は最美はしや。

註　第六篇は二章八—十四節で五五調である。

（八節）（和）に「聲きこゆ」とあるは正しからず、こゝで「聽けよ」と云ふはたゞかけ聲であつて、聽くのは聲でも足音でもない。

（九節）（和）に「我愛する者は獐の如くまた小鹿の如く」とあるは二章十七節八章十四節に似たる註である。また「立て」とあるも註である。「壁」はアラメイク語である。

（十二節）（和）に「鳥のさへずる時すでに到り」とあるは正しからず。また「われ等の地に」とあるは註である。

（十三節）（和）に「わが佳耦よわが美はしき者よ起て出きたれ」とあるは十節の繰返しである。無花果樹も葡萄も戀愛の象徵である。古來畫家が裸體の前を隱すに無花果の葉を描いたのはこれが爲である。

（十四節）「聲を聽せよ」の字義は「汝を聽せよ」、「姿を見せよ」の字義は「面を見せよ」である。

第七篇　葡萄園の狐

女等

十五狐捕へよ我等の爲に、
小狐共を早く捕へよ、
葡萄園を荒し損なふ、
われ等が葡萄の花盛。

註　第七篇は二章十五節で四五調である。この短歌は少女等の歌ふた民謠である。（十五節）「狐」の原語を「山犬」と譯した例もある、士師記十五章四節。こゝの葡萄園は娘等の事で狐は附まとふ青年等の事である。そして十六節十七節はおそらく註であろう。

以上に例を示した湯淺氏の譯は、現今歐米の聖書學者の多數が考ふる如く、雅歌を以て抒情詩の一團と見做す見解に據つたもので、歌の本文と註とを區別しようとする試みに於ても、或る先進の學者の說を參照されたものであらう。

次は土居教授による雅歌の譯である。この譯は、發表は今紹介した湯淺氏の譯より早いのであるが、同教授が雅歌民謠說の根據を理解の上なほ一歩を進め「雅歌の成立を、わが謠曲の成立と比較することによつて、雅歌戲曲說と民謠說とを綜合し、全體としての結構を指示することができるやうに思ひはじめたので」試みられた譯である。即ち土居教授の想像さるゝ所では、イスラエルの民は「わが室町時代の禪僧達が元曲に接し、その模倣ではなく、その刺戟から日本的な戲曲を娛まうとした時、語句を練り、想を構へることに集中せず、自由に昔の傳說と章句とを借り來

り、巧みにつゞり合せ、舞を中心にした謠曲を作りあげたやうに、ギリシヤ劇の刺戟により、彼等自身の戯曲を有せんとし、しかし根本から創作する藝術的熱誠を缺ぎ、舞を中心にし、人口に膾炙せる物語に基き、二十餘の民謠を綴り合せてこの一戯曲をなしたものではあるまいか。……獨創的なること、個性的なることを文學的創作の殆んどすべてとし、他人の章句を巧みに組合せて一篇の戯曲を組立てるやうなことに興味を感ずることが曾てなかつた西洋人が、雅歌に對しかゝる見方をしないのは自然であるが、私の想像が正しいとするならば、謠曲を有する日本人こそこれを理解する便利な境遇にある。」(『思想』(第五十四號、大正十五年四月發行)中の土居教授の「ソロモンの歌」參照)。

以上の見地から試みられた土居教授の譯中、前に掲げた湯淺氏の譯例に當る個所を引用すれば次の如くである。

第　二　場

次の朝、シュラミの女、花嫁部屋にて、戀人の彼女を救出せんとて來るべきことを信じつゝ

シュラミの女　わが背子の音なひすなり
　山を跳び
　岡を躍りて
　わが背子はさを鹿のごと。

　わが背子ぞ見ゆ壁のうしろ、
　窓をのぞき

蔀にたゝずみ
わが背子は我に語る
「我妹子よ立ちあがれ、
たをやめよ來れ、
見よ、冬は去り
雨やみて、日うらゝか、
野には花さき
鳥うたひ、
やま鳩の聲もきこゆ。

無花果は果を結び、
葡萄花さき
馨りたゞよふ。

いざ我妹子よ、わが鳩よ
岩の迫間

崖のかげ
ながの面を見せしめよ、
ながの聲を聞かしめよ、
ゆかしその聲
うるはしその面」

幻の戀人のためにうたふ

小唄一　狐捕へよわれらのため
葡萄の園をふみ荒らす
かの小狐を……
我等の園は花ざかり。

小唄二　わが背はわが身のもの、
わが身はわが背のもの、
さ百合の中に羊を飼へる。

小唄三　朝風冷しく

夜の影去るまで
我背子よ戻りきて
雙が岡に
さをしかの如くあれ。

但しこの小唄の二と三は、湯淺氏の方では註と見て本文から省かれてゐる部分に屬する。なほ土居教授は『思想』の第五十五、六號（大正十五年五月、六月發行）に「民謠としてみたソロモンの歌」の譯を發表され、この方には詳註も附せられてゐるが、今は略する。

五、加特力教會に於ける聖書の和譯

我が國に於けるローマ公教會では、明治二十八年（一八九五）馬太及び馬可の福音書を東京で出版してゐる。これはヴルゲト（聖ヂェロームのラテン譯）からの譯で、日本人では高橋五郎氏が補佐せられたとのことである。而して翌明治二十九年には東京の大司教ペトロ・マリア・オズーフ師認可の『聖福音』が出てゐる。是はローマ字で書かれ、ラテン文と對照されてゐる。次はラゲ神父（白耳義國人）の新約聖書全體の譯であるが、是は武笠三氏其他の助けを得て、明治三十八年頃から着手され、四十三年七月に出版された。その「主の祈」は次の如くである。

天に在す我等の父よ、願くは御名の聖と爲られん事を、御國の來らん事を、御旨の天に行はるゝ如く地も行はれん事を。我等の日用の糧を今日我等に與へ給へ。我等が已に負債ある人を赦す如く、我等の負債をも赦し給へ。我

等を試に引き給ふことなく、却て惡より救ひ給へ、（アメン）

なほ我が國におけるローマ公教會の祈禱書中にあつて、ミサ聖祭其他に用ゐらるゝ主禱文はラテン古譯よりの譯であるとのことであるが、ラゲ師の譯と大體同じである。

日本におけるギリシヤ正教會では、ニコライ主教主任となり、中井氏之を助けて新約聖書を譯した。初め出版されたのは明治三十年代でその後改訂せられたであらう。私の所にあるのは一九一七年即ち大正六年の版であり、日本正教會翻譯『我主イイスス ハリストスの新約』となつてゐる。前との比較上此譯による「主の祈」を左に掲ぐることにしよう。

天に在す我等の父よ、願はくは爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は、天に行はるゝが如く、地にも行はれん、我が日用の糧を今日我等に與へ給へ、我等に債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給へ、我等を誘に導かず、猶我等を凶惡より救ひ給へ、蓋國と權能と光榮は爾に世世に歸す、「アミン」

この最後のところは、前に記した『ドチリイナ・キリシタン』の中の「主の祈」を初めとしてローマ公教會關係の聖書にはなく、新教でも共同改譯の新約では之を省いたことは既に見た如くである。ギリシヤ正教會ではこの點を異にしてゐる。

六、參考書

以上の歷史を草するに當つて、聖書の和譯文獻以外、私の主として參考にしたものを記せば——

一、神學博士故高木壬太郎氏著『基督教大辭典』（明治四十四年、東京、警醒社發行）中の「日本譯聖書」の項。

二、『教界時報』大正十一年八月四日號より九月十五日號に亘る別所梅之助氏の「新約書の飜譯について」。前記の如く新約聖書改譯の記事が主要部をなして居り、改譯委員の一人の記錄として尊重さる可きものである。『セルパン』昭和九年一月號以下に掲載の同氏の「聖書邦譯の思ひ出」も同じ趣旨のものである。

三、F. E. Aurell 氏著『聖書和譯の歴史と聖書協會』（大正十五年東京米國聖書協會發行）。假名書きではオーレルとあるべき著者の名が表紙にアウレルとあるのはいかゞなものであらうか。內容も聖書協會發行としては飽き足らぬ點が多い。

四、T. H. Darlow 及び H. F. Moule 兩氏共編 *Historical Cadalogue of the Printed Editions of Holy Scripture in the Library of the British and Foreign Bible Society*（發行所 The Bible House, 146 Queen Victoria Street, London, E. C. 1903-11）中の 'Japanese' 及び 'Japanese.—Luchu'. の部。是は聖書協會所藏の文獻に據つたのであるから最も確かな書志である。

五、『神學評論』ベリイ博士在職二十五年記念論文集（昭和六年五月發行）中の拙稿「聖書和譯の歴史」。

六、『同志社高商論叢』第九輯（昭和九年一月發行）中の重久篤太郎氏の「海外及琉球に於ける聖書の邦譯」。關係文獻並に外人に就いての調査委しく、終に添へられた「日本聖書初期傳來・飜譯・研究年表」また頗る有益である。

七、神學博士故高木壬太郎氏著『基督教大辭典』の『補遺』（別冊）（昭和九年五月改訂發行）中の拙稿「日本譯聖書」。

なほ今度の稿は、五、七執筆の後で新たに知り得た材料によつて舊稿の誤を正し、且つ敷衍したものである。

（昭和十年（一九三五）六月九日）